

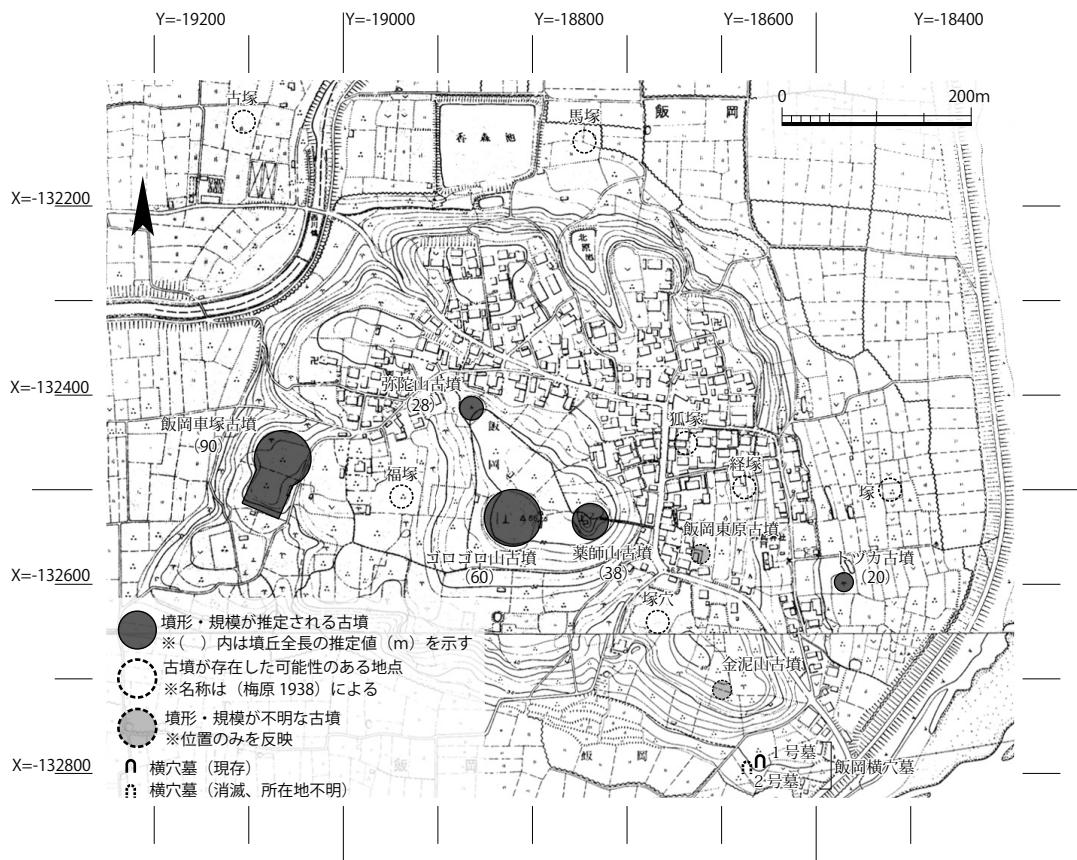
1. 京田辺市飯岡車塚古墳出土 埴輪の再整理

吉永健人

1. はじめに

飯岡車塚古墳は京田辺市飯岡に位置する古墳時代前期の前方後円墳である。当古墳が位置する飯岡丘陵は木津川を西から見渡すことのできる独立丘陵であり、最高部で標高 67m を測る。丘陵には車塚古墳のほかに薬師山古墳、トヅカ古墳、ゴロゴロ山古墳、弥陀山古墳などが造営され、飯岡古墳群を構成する（図 1）。その中でも飯岡車塚古墳は全長約 90 m という規模を誇る古墳群内唯一の前方後円墳であり、ひときわ大きな存在感を放っている。

飯岡車塚古墳では昭和 51 年（1976）に発掘調査がおこなわれ、楕円筒埴輪をはじめとした埴輪が得られたが、一部資料のみの報告にとどまり（吉村 1977）、これまでその詳細は不明であった。今回、京田辺市史編さん事業の一環として、京田辺市所蔵の埴輪を改めて整理し、新たに観察・図化をおこなった。本稿ではその調査成果を報告し、飯岡車塚古墳出土の埴輪の位置づけをおこないたい。



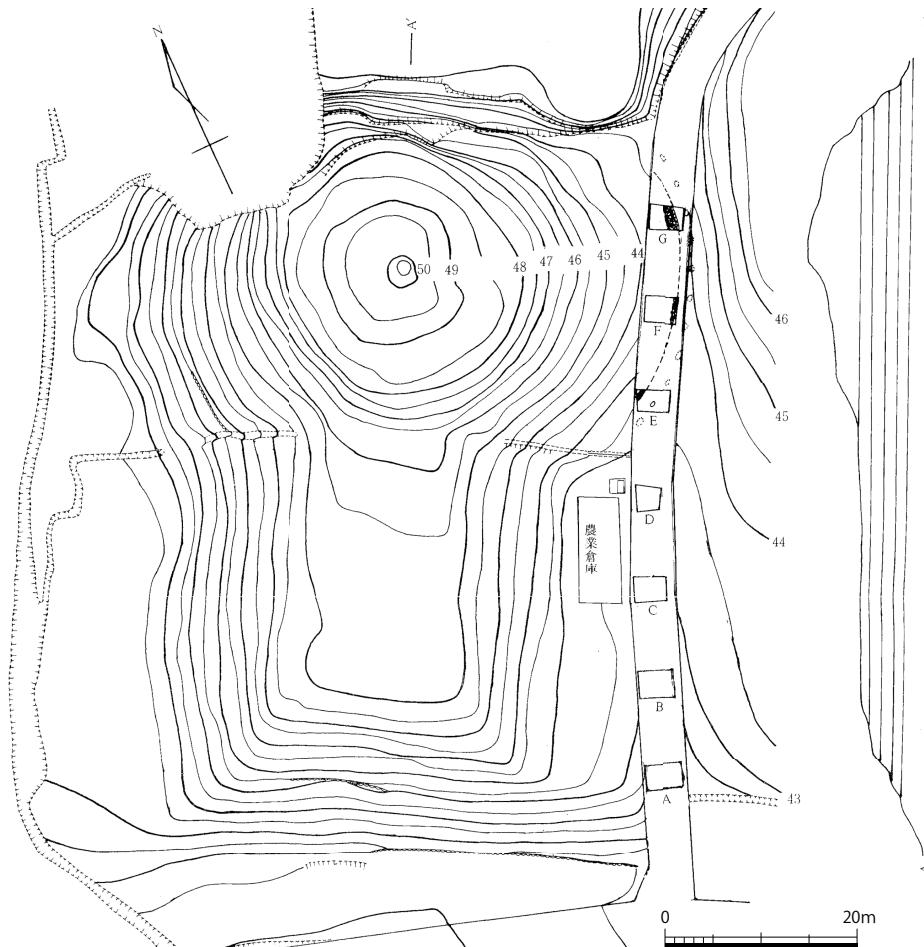


図2 飯岡車塚古墳トレンチ配置図 (S=1/800) (吉村 1977 より引用)

2. 概要

当古墳における最も早い調査は明治35年（1902）におこなわれた。調査をおこなった梅原末治氏は、多種多量の石製品の存在について指摘する一方、「埴輪圓筒片ハ見當ラズ」と報告している（梅原 1902）。しかし、その後の再調査で後円部墳頂、前方部上先端、前方部裾付近で埴輪片が採集され、飯岡車塚古墳において埴輪の存在が知られるに至る（梅原 1974）。

その後、昭和51年（1976）に田辺町教育委員会（現京田辺市教育委員会）によって、道路拡充工事に伴う発掘調査がおこなわれた。墳丘東側裾付近を発掘したところ、最下段の葺石と裾部に樹立されていた楕円筒埴輪を原位置で検出した（図2）。このほかにも墳丘上で円形透孔を穿つ円筒埴輪片が採集されていることにふれ、墳丘外周と墳丘上の円筒埴輪は性格がやや異なる可能性を指摘している（吉村 1977）。

報告では、原位置で出土した比較的残りの良い楕円筒埴輪（Gトレンチ出土）のみ図示されており、他の資料については未報告のままであった。そのため、飯岡車塚古墳の埴輪の位置づけは十分に定まっていないといえる。今回再整理をおこなったところ、1976年の調査時に出土したもののはか、その前後に採集されたものなど、一定数の未報告資料を確認できた。唯一図化されていた楕円筒埴輪も含め、改めて観察と図化をおこない、その成果を報告する。

3. 墳輪

(1) 楠円筒埴輪 1 (図 3)

後円部東側裾部 (G トレンチ) において原位置で出土した楕円筒埴輪である。この楕円筒埴輪は器高 71.4cm、長軸側の底径 44.7cm、短軸側の底径 31.0cm を測り、やや上すぼみな形態に復元される。底部高は 21.0cm、突帯間隔は 16 ~ 17cm で揃う。

口縁部に関して、報告ではさらに上に続くように報告されているが、今回改めて実見すると、ごくわずかに本来の口縁端部が残存する部分が確認できた (写真 1)¹⁾。口縁部高が 1.5cm と極めて狭く、極狭口縁と呼ばれる形態を呈するが、通常の折曲げたり外反させたりする形態ではなく、単純に直立させる形態となる点が特徴的である。

透孔は 2 段目・4 段目の長側面に逆三角形を 2 孔ずつ、計 4 孔穿つ。

外面調整は底部がタテハケ、2 段目以上は断続的な左上がりのナナメハケを施すが各段とも下方の突帯付近をヨコハケした後にナナメハケに移行する。いずれも突帯貼付のためのナデに消されており一次調整と考えられるが、一部にヨコナデを消すようにハケが施される箇所も見

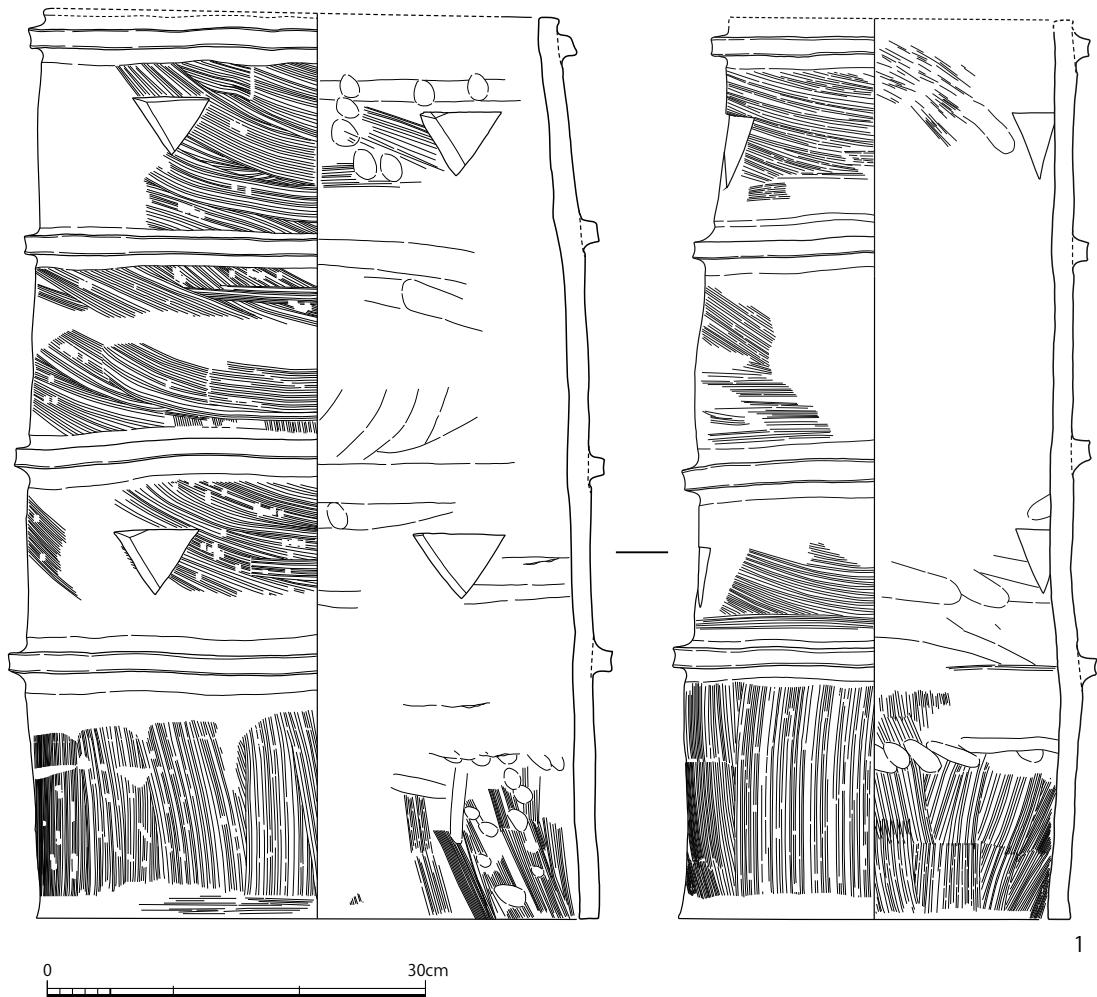


図 3 飯岡車塚古墳出土の埴輪 1 (S=1/6)



写真1 楕円筒埴輪1の口縁部

の接合痕がわずかに確認できる。このことから、底部は高さ12cm程度の粘土板で基部を作り、その上に粘土紐を積み上げていったと考えられ、この部分は粘土板と粘土紐の境界を丁寧なナデによって接合した痕跡と推測できる。

突帯は突帯高1cmを超える、断面は台形ないしM字形で突帯中位がわずかに凹む。突帯割付技法や突帯補充技法については、現在接合復元されているため、確認できない。

底面は基本的に平滑だが、わずかに作業台の木目、もしくは埴輪の下に敷いた草木類の圧痕が薄く残っている部分もある。

2段目以上には赤色顔料が残る。長軸側外面には黒斑が確認できる。

(2) 円筒埴輪・楕円筒埴輪・朝顔形埴輪(図4)

上記の楕円筒埴輪以外については、全形を知り得る資料はなく、破片資料がほとんどである。それらのうち比較的残りの良い埴輪片を抽出し、図化をおこなった。

2・3は口縁部片である。2は口縁部径37.4cm。直下の突帯と口縁端部との間隔が極端に狭い極狭口縁である。端部はやや上方につまみ上げるようにヨコナデを施す。突帯は上辺と下辺がナデによって内湾する。3は小片のため口縁部径は不明である。直下の突帯まで残存しておらず不明だが、2より口縁部高が高くなる。短く外反し、口縁端部は中央がヨコナデによってわずかに凹む。両者ともに磨滅が激しく器面調整ははっきりしない。

4・5は胴部片である。4は胴部径約36.9cm、5は胴部径約39.0cmに復元できる。ともに突帯部分が剥離するが、突帯割付技法は不明である。また円形(もしくは半円、巴形)透孔の一部が確認できる。4・5ともに外面の摩滅が激しく判別が難しいが、4にはタテハケ、5にはタテハケと一部その上にヨコハケが施される。内面は4にはヨコハケと一部ユビオサエ、5にはナデが認められる。両者ともに外面にわずかに赤色顔料が残存し、4は黒斑も確認できる。

6・7は突帯部分である。6は突帯幅約2.0cm、突帯高約1.2cmで、胴部径は約23.0cmに復元でき、他の資料と比べて径が小さい。上辺と突帯中央がヨコナデによって内湾し、M字状を呈する。外面内面ともに調整は不明である。7は突帯高約1.8cmでほかの資料と比べて、比較的細く高く突出する。ナデにより各辺が内湾し、下辺が突出する。

8は逆三角形の透孔を残す資料で斜辺の一部が遺存する。摩滅が激しいが、外面はヨコハケ、またはヨコハケ後にナデ、内面はナデと推測される。

9・10は底部の資料である。9は底径32.9cm、10は底径35.2cmに復元できる。9には

受けられる。また、底端部付近の外面は水平なヨコハケやナデが施される。ハケメはいずれも12本～17本/cmの浅く細いもので、工具幅や施工単位の判別は困難である。

内面調整はハケとユビナデである。底部付近は約12cmの高さまでタテハケが主体的に施されるが、その12cmラインでは左上がりのユビナデが丁寧に施されてハケを消している。さらにユビナデの下に粘土紐

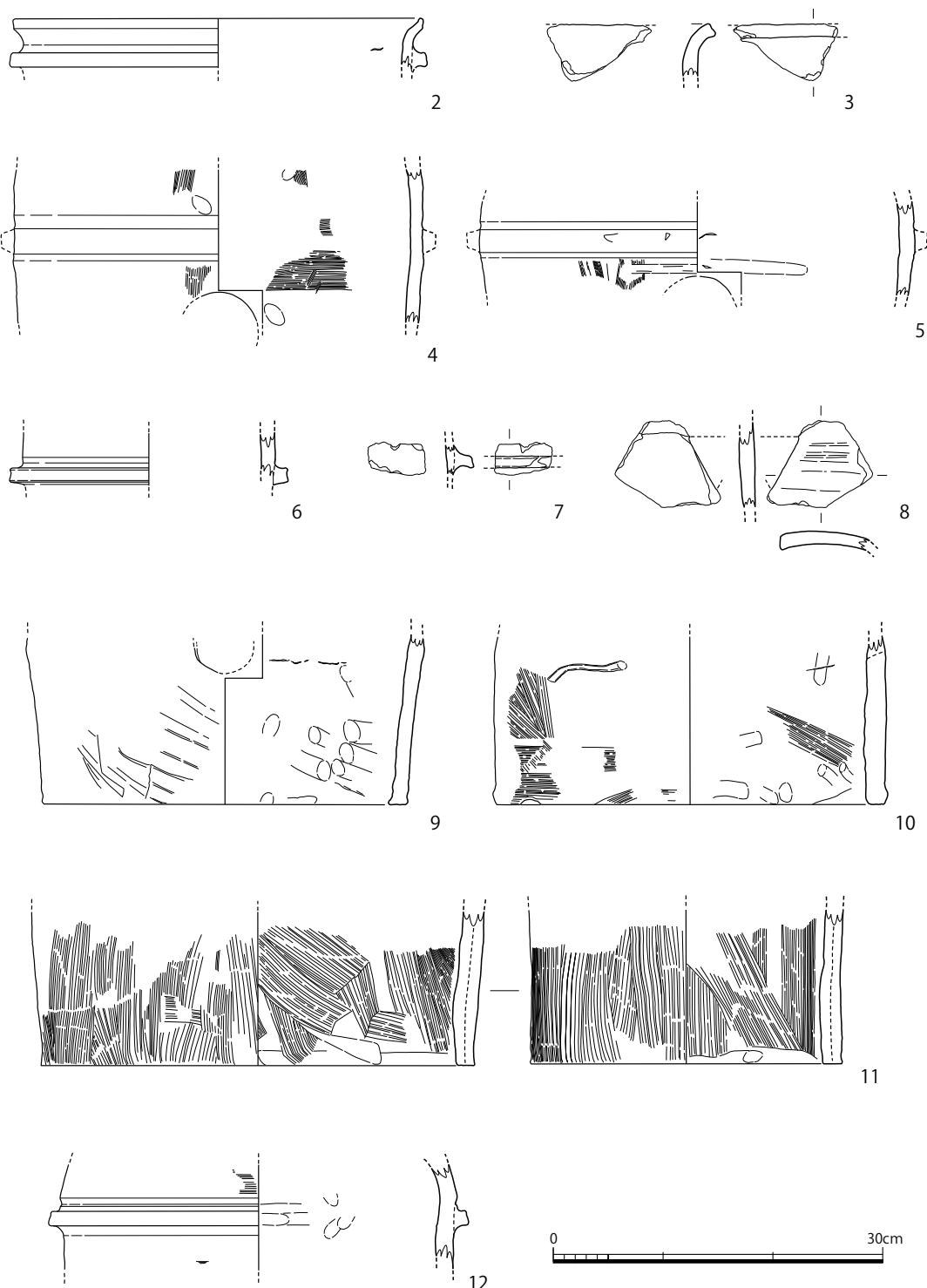


図4 飯岡車塚古墳出土の埴輪2 (S=1/6)

高さ約12cmの部分に円形もしくは半円形の最下段透孔が穿たれている。外面調整はヨコハケ、ナナメハケが認められる。内面はユビナデで、約13cmの高さに粘土紐接合痕がみられる。10は外面調整にヨコハケとそれを切る左上がりのナナメハケが認められる。内面にはナナメハケとナデが認められ、ハケの後にナデ消していると考えられ、底部端付近は特に丁寧にナデが施される。また、高さ約12cmの部分には接合痕が残り、その上に上下方向のナデ痕も認められる。厚さは9が1.2cm～1.5cmであるのに対し、10は約2.0cmで厚い。

11は楕円筒埴輪の底部である。長径39.4cm、短径28.4cmを測る。外面はタテハケ、内面は左上がりのナナメハケとタテハケが施されている。底端部付近の内面には横方向のナデが施される。厚さは2.0cm程度で10と同様に厚く、さらに2枚に分離するように剥離していることからも、うすい粘土板を2枚重ねて基部を形成したものと推測される。

12は朝顔形埴輪の胴部から肩部にかけての資料とみられる。胴部径は突帯直上付近で約36.2cmを測る。突帯は下辺がやや突出し、中位がやや凹む。突帯の上から内反して肩部を形成すると考えられるが、突帯直上では肩が張るようにやや外に膨らむ。肩部外面には水平なヨコハケが認められ、内面では突帯裏を中心にヨコナデが認められる。

(3) 器種不明の埴輪(図5)

13は器面に対して垂直方向に粘土を貼り付けて何らかの突出部を形成しており、その剥離面には幅0.5mm程度のくし状の工具による不定方向の刻み目を施す。突出部の全体像は不明だが、剥離面の刻み目については粘土貼り付けの強度を高める効果を狙ったものであり、同様の痕跡は鰯付円筒埴輪の鰯部の接合によくみられる。当資料もその可能性があるが、全体像が不明瞭なため、可能性を指摘するにとどめておきたい。器壁は厚さ約1cmで内外面調整はともに不明瞭である。

14は突帯部の資料だが、突帯は内側に屈曲する器面のちょうど屈曲部外面に取り付けられている。突帯の突出度が高く、上辺、下辺、中央部分はいずれも強いナデによって内湾している。朝顔形埴輪の一次口縁部ないしは有段口縁の屈曲部にあたる可能性がある。

15は外面に綾杉文が線刻されている資料である。厚さは1.3cm程度で、3.0cm四方程度の小片である。先端部が1.0mm程度のくし状の工具で器面に線刻しており、その下にはハケが施されているのがわずかに確認できる。まず1本の直線を引き、その線を中軸にして約5.0mm間隔で斜めの線を両側に引く。その後斜線のもう一方の端を繋ぐように中軸線に平行する線を引いている。家や盾などの形象埴輪の可能性が高いが、小片のため器種は不明である。

4. 出土位置からみた埴輪樹立のあり方の検討

報告では墳丘上と裾部で性格の違う埴輪が樹立していた可能性を指摘している。調査位置が限られ原位置出土の資料が希薄であること、破片資料が多いことなど、当古墳の樹立状況を復元するには制約が多い。ただし、楕円筒埴輪の可能性の高い破片が裾部(Eトレーナー)出土資料に多く、墳頂部で採集された資料の中には見当たらぬ点からは、楕円筒埴輪は裾部を中心に樹立していた可能性を指摘することができる。しかし、樹立位置による埴輪の使い分けを認める積極的な根拠は見出せない。全体像の復元には今後の調査に期待するほかない。

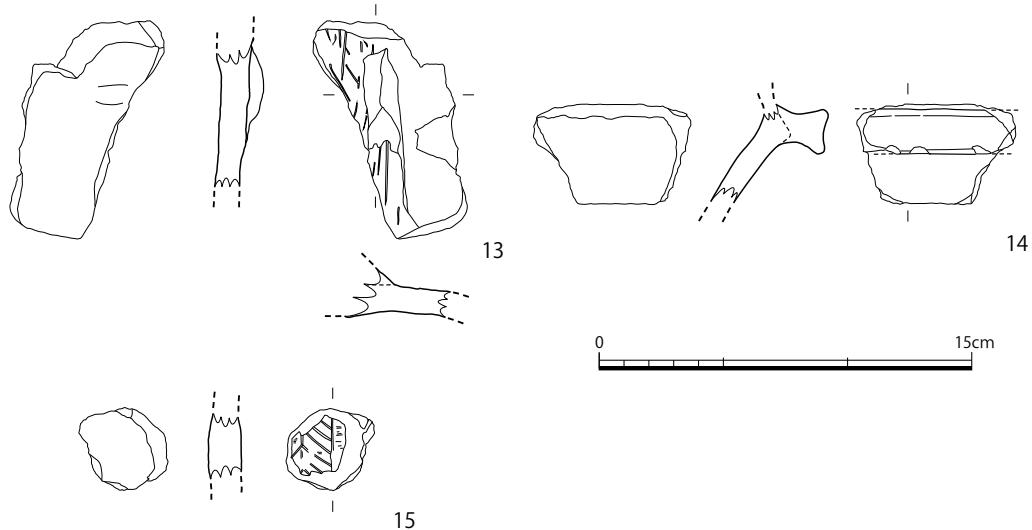


図5 飯岡車塚古墳出土の埴輪3 (S=1/3)

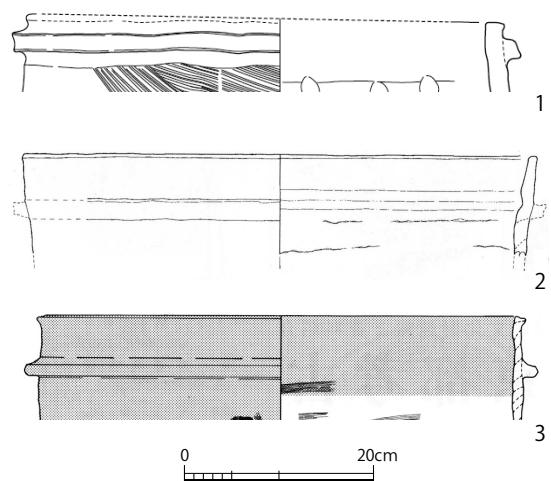
5. 飯岡車塚古墳出土埴輪の位置づけ

(1) 時期の検討

以上でみてきた埴輪の各特徴をもとに、廣瀬覚氏の編年（廣瀬 2015）と照らし合わせながら、位置づけをおこなう。

まず透孔の数、口縁部形態、器種構成などからはI期的な様相が認められる。特に口縁部については口縁部高が著しく短い極狭口縁とよばれるタイプが特筆される。2のような端部を折り曲げる通有の形態だけでなく、楕円筒埴輪1のように短く直立するタイプも認められた。また、楕円筒埴輪は今回報告した個体以外にも、器面の湾曲が弱い破片資料が多く確認できる。墳丘全体の樹立状況は不明だが、調査がおこなわれた墳丘東部分で墳丘裾をめぐるように楕円筒埴輪が検出された状況を鑑みても、埴輪全体に占める楕円筒埴輪の割合はある程度大きいものと推定できる。

このように極狭口縁の存在、楕円筒埴輪の様相から、I期の中でも新相に位置づけることができるだろう²⁾。特に極狭口縁は廣瀬編年においてI期新相のメルクマールとされており、大きな根拠となりうる。楕円筒埴輪1のような短く直立する口縁部形態に関しては、当資料に比べて口縁部高はやや高くなるものの、天理市西殿塚古墳（松本編 2000）や宇治市一里山古墳（鐘方 1985）に類似する例が確認できる（図6）。口縁部片3のように極狭口縁より口縁部高が高いものがあることも併せて考えれば、当段階に



1. 飯岡車塚古墳 2. 西殿塚古墳 3. 一里山古墳

図6 短く直立する口縁部の例 (S=1/8)

は多彩な口縁部形態が存在していたと推定できる。また、外面調整は摩滅が著しいものも多いが、下方の突帯・底面側をヨコハケした後にナナメハケに移行するという方法が複数の資料で認められた（1・9・10）。こうした調整のあり方は同時期にあたる豊中市大石塚古墳・池田市池田茶臼山古墳・神戸市白水瓢塚古墳などでも確認できる³⁾。各規格に関しては判明する資料が少ないものの、楕円筒埴輪1にみられるあり方は当該期の様相と大きく矛盾しない。

一方で新しい様相を示す点もいくつかある。今回新たに確認できた最下段透孔（9）はⅡ期以降に多くみられる属性である。また、I群埴輪に多くみられる内面ケズリ調整は確認されずハケ・ナデのみと考えられる。他にも、今回複数の資料で共通して確認できた技法として、底部の成形技法が挙げられる。楕円筒埴輪1や9・10において12～13cmの高さに粘土接合痕やそれを消すようなナデが認められる。このことから12～13cmの粘土板を基部とし、その上から粘土紐を積み上げていくという工程が推定できる。このような「粘土板基部成形」は、I群には約10cm、Ⅱ群には約15cmの粘土板を基部として用いることが多く（廣瀬2015）、当資料の基部高がちょうどI群とⅡ群の中間の数値を有していることは示唆的である⁴⁾。

（2）周辺の古墳との比較

飯岡古墳群での埴輪のあり方は現状不明だが、当該期の京田辺市域では大住南塚古墳（鷹野1987）をはじめとしたいくつかの古墳において埴輪の出土が認められる。大住南塚古墳の埴輪はⅠ期後半～Ⅱ期前半に位置づけられると考えられるが、内面ケズリ調整、方形透孔、朝顔形埴輪の頸部突帯が屈曲部のやや下方に取り付く点など、飯岡車塚古墳には認められない属性を有している。また、興戸2号墳（梅原1955）や近年発掘調査がおこなわれた天理山古墳群の埴輪もこれらと前後する時期に位置づけられる可能性が高いが、形態・技術的差異が目立つ。

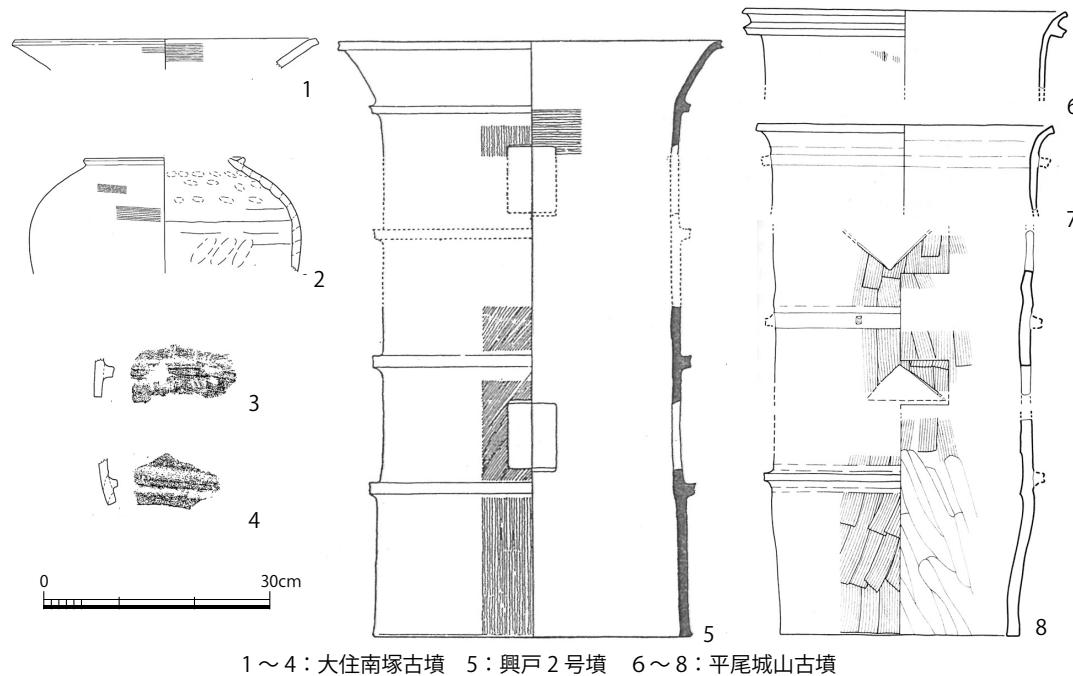


図7 周辺におけるⅠ期後半～Ⅱ期前半の埴輪資料 (S = 1/10)

木津川右岸では、木津川市平尾城山古墳で当該期のまとまった埴輪資料が得られている（近藤 1990）。平尾城山古墳の埴輪は正逆の三角形を中心とした透孔を一段中に 4 孔穿ち、極狭口縁を有している点で飯岡車塚古墳と共に通するが、底部内面にケズリが認められる点、外面はタテハケを主体として突帯下部付近に水平なヨコハケを施す点、楕円筒埴輪が認められない点など、相違点も少なくない。

（3）小結

以上みてきたように飯岡車塚古墳の埴輪は I 群から II 群への過渡的様相を呈しており、I 期新相段階における埴輪の様相を捉える資料として重要といえる。また周辺地域における埴輪のあり方をみても古墳ごとにその様相は異なっており、各古墳が個別に埴輪を受容し、ある程度独立した埴輪生産をおこなっていると推測できる。そうした状況は継続的な埴輪生産が認められる八幡男山地域や乙訓向日丘陵でも指摘されており（廣瀬 2015・2019 ほか）、古墳時代前期における埴輪生産のあり方を示している可能性が高い。今回報告した飯岡車塚古墳の埴輪はいまだ十分に評価が定まっていない田辺地域、ひいては南山城地域における埴輪生産のあり方を考える上で欠くことのできない資料といえるだろう。

6. おわりに

本稿では未報告資料も含めて飯岡車塚古墳出土の埴輪資料を再整理し、その位置づけを試みた。その結果、当古墳の埴輪は埴輪編年 I 期新相に位置づけられることが分かり、I 群から II 群への過渡的なあり方を示していることを指摘した。飯岡古墳群は京田辺市域において最も長期的に古墳造営をおこなった地域であり（和田 1992）、その中でも飯岡車塚古墳は規模・墳形などから有力な被葬者の姿が想起され、出土した多数の石製品もそれを裏付けている。飯岡車塚古墳の実態を明らかにするにはいまだ多くの課題を残すものの、今回報告した埴輪資料は当古墳を考える上で重要な材料となるだろう。今回の成果が有効なデータとして活用され、今後の飯岡車塚古墳をめぐる議論・研究の進展に寄与することを期待する。

註

- 1) 鐘方正樹氏はこの楕円筒埴輪の長軸側口縁端部の左右に欠失痕跡があり、その箇所には松岳山古墳出土の楕円筒埴輪のような特殊な鰐飾りが取り付いていた可能性を指摘しているが（鐘方2005）、今回観察したところそのような箇所は確認できなかった。今回口縁端部として判断したのは短軸側の一部分である。
- 2) 廣瀬覚氏も楕円筒埴輪の特徴から、飯岡車塚古墳の埴輪を I 期新相に位置づけている（廣瀬2015）。
- 3) 廣瀬覚氏のご教示による。
- 4) ただし基部の高さは底部高の約半分に設定されることが多く、II 期における基部高の伸長は最下段の突帯を省略することによって底部高が著しく高くなることに伴うものであるということ（廣瀬2015）には留意が必要である。

謝辞

本調査にあたって、上野あさひ氏（京田辺市文化・スポーツ振興課）、桐井理揮氏（京都府教育委員会）、廣瀬覚氏（奈良文化財研究所）のほか、京田辺市史編さん室の皆さんより大変有益なご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 諫早直人・馬渕一輝 2021 「京田辺市トヅカ古墳出土遺物の再検討」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 梅原末治 1920 「飯ノ岡ノ古墳」『京都府史跡勝地調査会報告 第二冊』京都府
- 梅原末治 1955 「第3 田邊町興戸の古墳」『京都府文化財調査報告』21 京都府教育委員会
- 梅原末治 1974 『近畿地方古墳墓の調査 三』日本古文化研究所
- 鐘方正樹 1985 「宇治市一里山出土の古式円筒埴輪」『京都考古』第41号 京都考古刊行会
- 鐘方正樹 2005 「玉手山古墳群の研究成果と諸問題」『玉手山古墳群の研究V—総括編—』柏原市教育委員会
- 桐井理揮 2019 「宇治市一本松古墳の埴輪とその年代」『京都府埋蔵文化財情報』第136号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査センター
- 近藤喬一編 1990 『京都府平尾城山古墳』(山口大学人文学部考古学研究室研究報告第6集)
- 鷹野一太郎 1986 『大住南塚古墳発掘調査概報』田辺町教育委員会
- 高橋美久二 1969 「八幡丘陵遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1969)』京都府教育委員会
- 鷹野一太郎 1987 『大住南塚古墳発掘調査概報II』田辺町教育委員会
- 廣瀬覚 2003 「摂津稻川流域における前期古墳の埴輪とその系譜」『古代文化』第55卷第9号 財團法人古代學協会
- 廣瀬覚 2015 『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
- 廣瀬覚 2019 「妙見山古墳出土埴輪の位置づけ」『妙見山古墳 1967年調査報告—「畿内における前期古墳成立基盤の研究」の再検討—』京都大学大学院文学研究科
- 松本洋明編 2000 『西殿塚古墳・東殿塚古墳』(天理市埋蔵文化財調査報告書第7集) 天理市教育委員会
- 安田滋編 2008 『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 吉村正親 1977 『飯岡車塚古墳発掘調査報告』田辺町教育委員会
- 龍谷大学文学部考古資料室編 1972 『南山城の前方後円墳』
- 和田晴吾 1992 「第4章 山城」『前方後円墳集成 近畿篇』山川出版社

付表 墓輪資料観察表

報告番号	器種	部位	径(cm)			調整		スカシ孔 形/数	間隔(cm) 底部高/突帯間隔/口縁部高	焼成	色調	出土位置	備考
			底径	胴部径	口縁部径	外面調整	内面調整						
1	楕円筒	底部～口縁部	長：44.7 短：31.0	長：41.5 短：29.0	長：38.4 短：27.5	底部：タテハケ 2段目以上：(ヨコ ハケ→) ナナメハケ	ハケ→ナデ	逆三角/4	21.0/16.5/1.5	良好	にぶい黄緑～明黄緑	Gトレンチ	赤色顔料、底面平滑、 長側面側に緩に黒斑、 約12cmの高さの 粘土板で基部を形成か
2	円筒	口縁部	—	—	37.4	ナデ	ナデ	—	—/-3.1	やや甘い	にぶい黄緑	前方部頂	
3	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	—	やや甘い	にぶい黄緑～明黄緑	前方部頂	
4	円筒	胴部(突帯部)	—	36.9	—	タテハケ	ハケ・ナデ	円/—	—	良好	にぶい黄緑～浅黄緑	Eトレンチ	赤色顔料
5	円筒	胴部(突帯部)	—	39.0	—	タテハケ	ナデ	円/—	—	良好	にぶい黄緑～明黄緑	Eトレンチ	赤色顔料
6	円筒	胴部(突帯部)	—	23.0	—	—	—	—	—	良好	にぶい黄緑～明黄緑	Eトレンチ	
7	円筒	胴部(突帯部)	—	—	—	—	—	—	—	やや甘い	にぶい黄緑～明黄緑	不明	
8	円筒	—	—	—	—	ヨコハケ	—	三角/—	—	良好	にぶい黄緑～明黄緑	Eトレンチ	赤色顔料
9	円筒	底部	32.9	—	—	ヨコハケ ナナメハケ	ナデ	底部円/—	—	良好	にぶい黄緑～明黄緑	前方部頂	約13cmの高さの 粘土板で基部を形成か
10	円筒	底部	35.2	—	—	ヨコハケ ナナメハケ	ハケ ナデ	—	—	良好	にぶい黄緑～明黄緑	不明	約12cmの高さの 粘土板で基部を形成か、 器壁が2.0cm程度で厚い
11	楕円筒	底部	長：39.4 短：28.4	—	—	タテハケ ナナメハケ ナデ	—	—	—	良好	にぶい黄緑～明黄緑	Eトレンチ	器壁が2枚に剥離、 底部下端内面にコビナデ
12	朝顔形	胴部～肩部	—	36.2	—	ヨコハケ	ナデ	—	—	良好	にぶい黄緑～浅黄緑	前方部頂	赤色顔料、肩やや張る
13	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	良好	にぶい黄緑	前方部東柵	貼付け部分に刻み目
14	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	良好	浅黄～明黄緑	前方部頂	
15	形象？	—	—	—	—	ハケ？	—	—	—	良好	にぶい黄緑～浅黄緑	Eトレンチ	綾杉紋、赤色顔料

底径は底面の外径、胴部径は外径の最大値と最小値の平均値、口縁部径は口縁端部の外径を計測。

—は計測・観察不可能なものを示す。